

情報は得られるけれど…

清水 徹

基礎医学系助教授

筑波フォーラム (58) のIT革命の特集を読みながら、自分の研究分野で痛切に感じていることを再認識させられた。現在、自分は医学研究の中で病原細菌の研究を行っているが、時代の流れでゲノム解析という分野に足を突っ込み、つい最近、一つの病原細菌のゲノム塩基配列 (遺伝情報) をすべて決定した。その流れの中で、ゲノム解析という研究には実験も大切ではあるが、最も重要なのは情報解析であると痛感した。自分のデスクにコンピュータが二台も並び、インターネットに接続する環境があり、マウスをクリックするだけで全世界で行われているゲノム解析の結果が瞬時にして手に入る。研究者が何年もの歳月をかけて解析した膨大なゲノムデータを瞬時にして自分のコンピュータに取り込むことも簡単である。こういうことができるのはまさにIT革命の恩恵なのであろうし、数年前では考えられないことであるのも確かである。しかし、手元に

ダウンロードした膨大なデータを活用するのは人間であり、どういうゲノム情報をどのように他のゲノムと比較してどのような新しい知見を得るか、といった仕事は人間にしか思いつかない。コンピュータはある程度抜えるしソフトウェアの使い方もまづまづの自分でも、膨大な情報を目の前にして無力感を感じざるを得ない。道具はあるけれど使い方が分からない、というのではなく、どう使うかのアイデアが浮かばないのである。ずっと実験系の畑を歩んできた自分には、ゲノム情報科学という分野はまったくの素人であるので、そこから何か面白いことがたくさん引き出せそうなのに出来ない、というジレンマに陥っている。アメリカではゲノムに関わる実験系の人間と情報系のエキスパートが共同で解析を行っており、ゲノム情報科学の教育も積極的に行われていると聞く。日本では共同研究したくてもその分野の人材が圧倒的に不足している。IT革命の末路が、情報はたくさん得られるけれどその活用の仕方がわからない、というのではとても寂しい。ぜひとも先進性のある筑波大学に、生物遺伝情報を専門に教育する場を作り、この発展する分野での人材育成を真剣に考えていただきたいと切に願う。

(しみずとおる 病原細菌学)